

逆説形式による脱従属化の分類

Micheria

1. はじめに

本レポートでは、「脱従属化」のうち、「逆接形式からの変化」をタイプとして設定し、それらの類型化を試みる。ここでいう脱従属化とは、本来は後ろに主節を導くような形式を持った節、すなわち従属節が、省略を経ずに独立し、文として用いられるようになる変化を指す。本レポートは、こうした変化を経た逆接形式による節に、ノニ節、クセニ節、ド節、ガ節、ケド節が属していると考え。そこで、2.では前二者を「非難的意味の拡張」パターンとして、3.では残りを「違和感表示の拡張」パターンとして類型化することで、逆接形式からの脱従属化を整理したい。

2. 非難的意味の拡張

2.1. ノニ節

「のに」という形式は普通、逆接の機能を持ち、主節を導く形で使用される。

- ① すると四時十五分前頃から、今迄何とも無かつたのに、急に嘔気を催ふして来た。

(『吾輩ハ猫デアル』上)

ここでは、「今迄何とも無かつた」かつ「急に嘔気を催ふして来た」という二つの事実の継時的な生起が、「のに」で結ばれている。この背景には、「何とも無い」状態が継続するという話し手の認識が認められる。「のに」は、その認識に反して「嘔気を催ふした」ことに対する不適切な感じ、違和感を表示していると言える。その意味で、「のに」を「逆接形式」と呼ぶことができるだろう。また、この発話の焦点は、「急に嘔気を催ふして来た」ことにあるため、これを主節として、それゆえ、ノニ節を従属節として扱える。

ところが、以下②、③に表れるノニ節は、主節を伴わずに用いられている。

- ② 浪岡 小母さんに挙げる。

小母さん 儂、要りもしないのに。

(『奇蹟』第二巻第五号 大正二・五¹⁾)

- ③ カイ「野郎、ここの一番乗りは俺だつてのに」

(「機動戦士ガンダム」四三話)

これらノニ節による発話の終止は、単純な省略として、扱われ得ないと考えられる。

まず、「省略」という用語を定義しておきたい。講義内で紹介されたように、久野暲『談

¹ NDLでは「出版年不明」とされている。しかし、「新刊紹介」欄で『現代文藝叢書』二三巻(大正二・三 春陽堂)所収の相馬御風『峠』が言及されていることや、『現代傑作叢書』第二巻(大正二・五 植竹書院)の広告が掲載されていることなどから、大正二年五月号と推定される。

(Japan Knowledge 版『日本近代文学大事典』より「『現代文藝叢書』」項、「『現代傑作叢書』」項、など参照)

話の文法』²は「省略の根本原則」を、「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能 (recoverable) でなければならない」と定める。さらに、「どういうインフォメーションが自明であるかと言えば、それは、文脈から復元できる様なインフォメーションであろう」とも述べている。本レポートもこれにならい、文脈上に出現する情報こそが「自明」で「復元可能」な要素であり、こうした要素の欠落のみを「省略」として扱う。

以上の規定に従えば、②の復元された形は「要りもしないのに、くれる」だと言える。アニメ画面の描写から③を復元すれば、「ここの一番乗りは俺だってのに、抜かされた／先を越された」となるだろう。だが、こうした復元形よりもむしろ、「要りもしないのに、困ります／迷惑です」や「ここの一番乗りは俺だってのに、不愉快だ／良い度胸だな」などと、話者のマイナス感情を補充的に説明したほうが、当の発話を受ける実感に近く思われる。

たしかに、接続助詞「のに」自体が、後続節に対する話者の否定的感情を示し得るだろう。それゆえ、復元された形からも、話者の否定的感情を見て取ることができる。しかし、ここから帰結し得るのは、主節を伴わないノニ節と、完全文におけるノニ節との連続性に留まる。重要なのは、こうした発話の聞き手にとって、補充的な解釈へ至るために、文脈からの復元的な理解が必要でない点である。つまり、「話し手が抜かされた」ことを焦点的に意識せずとも、聞き手は、先の補充形にたどり着くことができる。このことは、③の文脈がなくとも、補充的な解釈が成り立つことから明らかであろう。

しかも、補充可能な要素は、その発話の不完全性を示している、とも考えられない。つまり、補充され得る要素は、言われるべきでありながら言われなかった情報ではない。なぜなら、文脈上は非自明でありながら、聞き手がそれを読み取り得るからである。たしかに、補充される要素は、否定的評価やマイナス感情などしか呼びえず、方向性を除いて漠然としている。だが、その要素が具体的な一つの表現によって説明されないことは、その発話の不完全性を根拠づけないだろう。

それゆえ、これらのノニ節は、自明な要素を欠いた「省略」でもなければ、不完全な発話でもなく、ノニ節の独立的な用法なのだと考えられる。したがって、これらの例は、「逆説形式からの脱従属化」に分類可能だと言える。

このようなノニ節の、話し手の否定的感情を表示する機能は、以下のような接続助詞「のに」が有する意味から、展開したものだと考えられる。

④ 吾輩は名前はないと屢ば断つて置くのに、此下女は野良ノ＼と吾輩を呼ぶ失敬な奴だ。

(『吾輩ハ猫デアル』上)

話し手は、「名前はない」という断りを受諾すれば、名前のように「野良」と呼ぶはずがない、と想定している。それに反する「下女」の振舞によって、話し手に生じる不適當感を、「のに」が代表的に示している。そのため、④の「のに」は、①と同様に逆接形式と言える。

² 久野暉『談話の文法』(大修館書店 一九七八・一二) 八頁

だが、この逆説形式を、たとえば「が」に置き換えると、元の文よりも不自然に感じられる。

吾輩は名前はないと屢ば断つて置くのだが、此下女は野良ノ＼と吾輩を呼ぶ失敬な奴だ。

この差異は、「失敬な奴だ」という否定的感情との親和性の高低に由来すると思われる。実際、この箇所を削った文を想定すれば、両者の間で自然さの差は感じられないだろう。このように、ノニ節と否定的感情とは、比較的に親和性が高いのだと言える。

こうした形式の性質が、脱従属化したノニ節にも影響を与えているのだと考えられる。たとえば、②は、「要らない」や「もしない」という表現が否定的なニュアンスを持つため、「儂、要りもしないが／けれど」とは言い換え難い。また、次のような例でも、「のに」による否定的感情の発露が確認できる。

- ⑤ 其時御母さんはせめて気立ての優しい嫁でも居りましたら、こんな時には力になりますのにと頻りに嫁々と繰り返して大に余を困らせた。

(「趣味の遺伝」)

- ⑥ やがて、今のは只希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つて居るから心配しなくつてもいと云ひながら笑つた。その位よく知つてるなら、始めから威嚇さなければいゝのに。

(「坊っちゃん」)

⑤や⑥におけるノニ節の後続節として、⑤で「残念です」など、⑥で「馬鹿らしい」などを補充的に解釈することができるだろう。一方で、⑤に「嫁はいません」、⑥に「威嚇した」と復元を施しても、これらノニ節の意味を正確に汲み取ったとは言えないように思われる。これらは、⑤の「せめて……なら」や、⑥の「始めから……しなければいゝ」の非難的なニュアンスと呼応しながら、話者のマイナス感情を表示していると言えよう。

次に掲げた⑦aのような例では、「わざわざ」によって、何らかの聞き手の行為を「非難されるほど不要な行為」とする評価が、聞き手の労に言及するような意味になり、かえって好評価を表していると思われる。そのために、⑦aの説明的な後続節として、「ありがとう」など感謝の形式を補充することができるのだろう。そうであれば、このような発話には、ある程度の否定的評価を示す形式が必要だと考えられる。これを踏まえれば、⑦bが同様に感謝の意味を表し得る一方で、cが不自然に感じられることは、「のに」が否定的評価を表示する機能を持つことの傍証となるだろう。

- ⑦ a わざわざ、よかつたのに。
b よかつたのに。
c わざわざ、よかつたのだが。

(作例)

以上のことから、脱従属化したノニ節は、「逆接形式からの変化」タイプのうち、「非難的意味の拡張」パターンに分類され得ると考えられる。

2.2. クセニ節

「くせに」については、講義資料で、十五世紀頃に連体修飾節から転じた逆接形式だという説明があった。これに対して、クセニ節が省略を受けず独立的に表れるのは、管見の限りでは近世末期頃からである。

⑧ 増「サアママ仇の字 ^(ママ)ば じめねへか

仇「ヲやおめへ主のくせに

増「また株でおつなくせだのそんならわたくしがおはじめもふそふト猪口をとる

(「梅暦余興春色辰巳園」巻四) 7オ

このクセニ節を省略とみなすならば、復元される完全文は、「主のくせに、自分で始めない」となるだろう。しかし、この発話からは、「主のくせに、何なんだ／いい加減にしろ」のような、補充的な説明を要する文を読み取るべきように思われる。さらに言えば、この発話の主意は、「自分で始めろ」という命令文である。このことは、「増」がクセニ節の発話を受けて、「わたくしがおはじめもふそふ」と発話していることから理解されるだろう。

この命令の意味は、先に復元した完全文から、派生的に生じていると考えられる。つまり、「主のくせに」が「自分で始めない」ことに対する非難的感情を示すために、その是正を求めるような意味、つまり命令的な意味が生じるのだと言えよう。

しかし、先述のように補充された文は、「自分で始めない」という文脈的に自明な情報を介さずとも、十分に解釈され得ると思われる。たしかに、「自分で始めろ」という具体的な命令文は、復元形を必要とする。だが、「主」に対する不満や非難の意味のみを示す「何なんだ／いい加減にしろ」という節は、それによらずとも解釈され得るだろう。そうであれば、「ヲやおめへ主のくせに」という発話は、自明の情報以上を含み、復元を俟たず解釈される、独立した文だと言える。さらに、こうした用例の出現時期と、接続形式への転化時期との前後関係から、クセニ節の脱従属化を確認できる。

また、先述の通り、接続形式としての「くせに」が持つ非難的感情の表示機能を、脱従属化したクセニ節も有している。この点に、この形式の連続性を求めることができるだろう。このことは、以下の用例群からも理解される。

⑨ 「先生ちつと活発に散歩でもしなさらんと、からだを壊して仕舞ひますばい。—さうして実業家になんなさい。金なんか儲けるのは、ほんに造作もない事で御座ります」
「少しも儲けもせん癖に」

(『吾輩ハ猫デアル』上) p.271

⑩ 校門をはなれるとあなたは少し笑ひ顔をして『今日叱られた人は誰れだつて』と中音になつてかう言つた。〔略〕『自分だつて叱られたくせに』と、我れにもあらず私は小声で言つてしまひました。

(『青鞥』大正四・一) p.87

⑪ アムロ「リュウの奴、軍人の癖に」

(「機動戦士ガンダム」三話)

それぞれの復元されるべき節は、⑨「金を儲けるのは造作もない事と言う」、⑩「叱られたことを馬鹿にした」、⑪「逆光線で戦わなくてはならないことに気付かずそのまま突っ込もうとした」であろう。とくに⑪で顕著なように、この発話だけで「リュウ」に対して「アムロ」が非難的感情を抱いていることは解釈可能であり、その解釈は、復元された完全文によって成立するのではない。

以上の検討から、クセニ節は、ノニ節と同様に「非難的意味の拡張」パターンに属すると考えられる。

3. 違和感を表示する機能の拡張

3.1. ド節

以下の用例におけるド節は、脱従属化を経て使用されていると考えられる。

- ⑫ ここちも苦しければ、几帳さし隔ててうち臥すところに、ここにある人、ひやうと寄り来て言ふ、「撫子の種取らむとしはべりしかど根もなくなりにけり。呉竹も、一筋倒れてはべりし。つくろはせしかど」など言ふ。

（『蜻蛉日記』巻中）

- ⑬ あだならぬ便りにて、確かに伝ふべきことありしかば、「かへすがへす、かくまでも聞こえじと思へど」など言ひて、

（『建礼門院右京大夫集』一〇六）

いずれも活用語の已然形に接続する点から、接続助詞の「ど」だと考えられる。しかし、本来導かれるべき主節はなく、文脈からも復元され難い。

完全文の接続助詞として「ど」が用いられた例は早く、上代には確認される。

- ⑭ 二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

（『万葉集』一〇六）

この「ど」は、「二人行く」と「行き過ぎ難い」との二節を逆接的に接続していると言える。つまり、「二人行く」かつ「行き過ぎ難い」という事態が、「二人行く」ならば「行き過ぎ易い」はずだ、という想定に反することへの違和感を、この「ど」が示している。言い換えれば、「PどQ」には、「PだからQは不自然だ」という意味が含まれている。このように、接続形式としての「ど」に、逆接的機能を認めることができるだろう。

さらに、「二人行けど行き過ぎ難き」は「秋山」を修飾している。意味の観点からは、「秋山へ二人行く」よりも「行き過ぎ難き秋山」が焦点であろうから、後者を主節として扱い得る。以上のことから、完全文における「ど」は、ド節かつ主節、という状態に対する違和感を示すと考えられる。また、ド節には、違和感の根拠を示す機能を捉えることができる。

完全文における逆接形式「ど」が上代から見られた一方で、⑫、⑬のように、ド節が主節を伴わない形で表れる用例は、中古に至るまで確認されない。したがって、二例は、本来従属節であるド節が、独立的に用いられるようになる、「脱従属化」の結果だと考えられる。

それらド節には、完全文における場合と連続的に、何らかの不適當感を示す機能が認めら

れる。たとえば⑫は、「つくろはせしかど、撫子が枯れ、呉竹が倒れたのは事実だ」などと復元できそうだが、「やっぱり、怒りますよね／悲しみますよね」などを補充して、弁明的な意味を受け取る方が自然に思われる。これは、「つくろはせ」たことが、先行する文脈から当然想定される事態を、多少なりとも抑制すると考えられるからであろう。つまり、「つくろはせしかど」は、「「つくろはせ」たのだから、そうでない場合と同程度に悲しむ／怒ることには違和感がある」というように解釈される。この違和感の主張が、たとえばノ二節のような、非難的感情に乏しいため、弁明という、聞き手への配慮を示すような意味に解されるのだと考えられる。⑬も、「きこえじと思」っていたことを根拠に、「あだならぬ便り」に託して便りを送る、自分への違和感が示されていると言えるだろう。

このように、脱従属化した下節では、主節に対する不当感の根拠を示す元々の機能が拡大的に使用され、何らかの「違和感を示す機能」を持つと考えられる。そのため、下節を「違和感を表示する機能の拡張」タイプに位置づける。

3.2. ケド節

『日本国語大辞典』「けれども」項によれば、逆接の接続助詞「けれども」は、「中世末期以後の助詞」とされている。他方で、主節を伴わないながら、不完全感を与えないケド節の用例は、やはり近代まで見られない。そのため、以下のようなケド節の例も、「逆接形式からの脱従属化」の結果だと考えられる。

- ⑮ 『私でもいいのか不知、毎度同じ人では何だかをかしかなくつて？私がかまはないけれども、あなたみんなにお話して見たの。』

『あなた肯いてくれるの、私どんなに嬉しいか知れないのよ。もうあなた皆様にお話したのしないのどころぢやありません。皆様が次回々々つて云つて相手にもしてくれないんだもの、困り抜いてみたところですよ。』

『さう、それならいゝけども。』

(『学校生活』明治三七・二)

- ⑯ 「えい、もう社へ行かなければ」と、力なく云つて、見るともなく妻君の油気もない頭の髪から、爪先の汚れた足袋まで見下した。洗ひさらしの地味な銘仙か何かを着て、只菊模様の襦袢の襟に艶があるばかり、健次は蓆で包んだ美人像を連想した。

「では、何時かの西洋小説の続きは聞かして頂けんのですね、私あの女の行衛が聞きたくてならないんだけど」³

(正宗白鳥『何処へ』明治四一・一〇)

³ これを倒置と解釈すれば、「私あの女の行衛が聞きたくてならないんだけど、何時かの西洋小説の続きは聞かして頂けんのですね」と復元されるだろう。しかし両者はニュアンスが異なるように思われる。というのも、復元後の文では、非難的でこそあれ「聞かして頂けん」ことを承諾しているが、元の文では、むしろ聞かしてくれと依頼しているように見えるからである。したがって、これを単純な倒置とみなすことはできないと考える。

- ⑰ カイ「そりゃ結構。イヒヒヒヒ」
 セイラ「いやらしい笑い方」
 アムロ「ふ。いいじゃないですか」
 セイラ「そうだけど」

（「機動戦士ガンダム」四二話）

ガ節・ケド節の「言いさし文」について、白川博之氏は、「聞き手に参照情報を提示すること」が「本来的な機能」だと主張する。その上で、聞き手が不在の発話に対しても、同様の見解を適用する可能性を示唆している。

「提示」だからといって聞き手存在発話を前提に考える必要はないのかもしれない。自分自身の認識状況を改変する、自問自答的な「条件の提示」という可能性もあって面白い⁴。

つまり、ケド節の本質的な機能は、参照すべき情報を提示すること、すなわち、聞き手の認識状況を改めることだと言うのである。たしかに、⑯のような例には、白川氏の指摘を適用できるだろう。なぜなら、「あの女の行衛が聞きたくてならない」という、聞き手にとって未知、あるいは意識されていない、話者の願望を参照させることで、聞き手の意識内容を改変できる。そこから派生的に、「社へ行く」という行為を抑制したり、「西洋小説の続きを聞かす」行為を促進したりと、依頼的な意味へ繋がるのだと考えられる。

その一方で、⑮や⑰のケド節は、対話者の発言を肯定するような内容しか持たない。もちろん、これに「承前的態度の表明」という意味を認めることはできる。だが、特に⑮では、一つ前の発話が既に「私はかまはない」ことに言及している。そのため、その重言と考えるのは不自然に思われる。さらに、独白におけるガ節の例である⑱も、対自己的な「条件の提示」とは考え難い。

- ⑱ シャア「さて、問題は私に明確なニュータイプの素養があるかどうかだが」

（「機動戦士ガンダム」四二話）

この発話の文脈は、「明確なニュータイプの素養」があれば「ジオング」という軍事的な乗物を上手く操縦できる。けれども、その素養の有無が明らかでない中で、軍人である話者に「ジオング」搭乗の必要が生じた。この操縦に際した発話が⑱である。こうした状況では、「話者に明確なニュータイプの素養があるかどうか」という「問題」に焦点化が置かれようと、「上手く操縦できるか否か」を重視する「認識状況」が改変を受けるとは考えられない。したがって、話者が自分の認識を改変しようとしているようにも見えない。

ケド節が認識の改めを要求するよう見えるのは、その節内容が話者の違和感を根拠づけることに由来すると考える。⑱では、当の根源的な問題意識が、搭乗しなければならない事実に対する違和感の根拠になっていると言えるだろう。⑯でも、聞き手の態度に感じられる不適當感の根拠として話者の願望を示され、結果的に先述のような認識、行動判断

⁴ 白川博之『「言いさし文」の研究』（くろしお出版 二〇〇九・六）三五頁、脚注

の改変を要求可能なのだと考えられる。このように考えれば、⑮や⑰では、承前が妥当であるにもかかわらず、完全に承認できない自分の認識に対する違和感の根拠として、承前の形式を内容とするケド節が発話されていると言えるだろう。

以上のことから、逆接の形式から脱従属化したケド節は、ド節と共に「違和感を示す機能の拡張」へ分類可能だと考える。

3.3. ガ節

講義でも言及があったように、「が」が完全文において逆接の接続助詞として使用され始めたのは、中世頃からだと思われる。

- ⑱ その時はわびしう、堪へがたく覚え候ひしが、おくれ参らせて後は、などさ覚え候ひけんと、くやしう候なり

(『宇治拾遺物語』巻五一八)

- ⑳ 去る三月にも御幸ありき。そのゆゑにやなか一両月世もめでたくをさまつて、民のわづらひもなかりしが、高倉宮の御謀反によつて、又天下乱れて世上もしづかならず。

(『平家物語』巻五)

どちらの例でも、「その時」や「なか一両月」における事実と、それと異なる後日の事実とを「が」が接続している。ここで話者は、「その時」における事実の継続を想定した上で、それに反する実現への違和感を表出していると言えよう。そのため、これらのガ節を逆接的形式と呼ぶことができる。

管見の限り、ガ節が独立的に表れる用例は、近代に至るまで見られない。

- 21 門口迄行つて戸を敲くと、無愛想な貌をして脊の高い憔悴した女が直ぐに戸を開けて「何の御用があるですか」と南方の訛りで云ひました、私は自分の家の方へ顛で指して「私は彼処のお隣り者です、見れば今お引越しなされたばかりの御様子ですから、何でもお幫助を致して可ければと思つて伺かつたですが」と云ひますと

(『太陽』明治三四・一一)

- 22 「方程式は其位で沢山だらう」と主人は乱暴な事を言ふ。「実は此式が演説の首脳なんですが」と寒月君は甚だ残り惜し気に見える。

(『吾輩ハ猫デアル』上)

- 23 ギレン「老いたな父上、時すでに遅いのだがな」

(『機動戦士ガンダム』四二話)

「が」は単純な接続の機能も有するけれども、ここではすべて逆接形式として捉えたい。

以上の三例では、あるべき主節が存在せず、文脈からの復元も困難である。21ならば「無愛想な貌をしている」、22「省けと言われた」、23「父は和平交渉をしている」などの復元も考えられるが、元の発話の与える意味から離れているように感じられる。

かといって、原文が不完全感を喚起する訳でもない。説明的な要素を補充するならば、21には「ご迷惑ではありませんか／家に入れてください」など、22には「分かっていますか／

よく聞いてくださいよ」など、23には「私の判断に従ってください」などが想定される。21に見られる「相手伺い」のような意味は、「お帮助」という恩恵の授与者に対する享受者のものとして帰結され難い態度への違和感を先に示すことで、聞き手の姿勢を緩やかに規定することから生じていると考えられる。22では、「演説の首脳」に対する聴衆のものとして不適当な姿勢への違和感が示されることで、聞き手の態度を変容させる依頼的な機能が生じているのだろう。23は、ノニ節ほどでないにせよ非難の傾向が強く、「君の行動は無意味だ」のように解釈できる。ただ、「時すでに遅いのだ」という言い切りの発話にも批判的な意味がある。むしろ、ここでは「遅い」ことが焦点化されるため、いっそう批判的に感じられる。これに比べると23では、問題が行動タイミングの適不適にずらされているように感じられる。このために、言い切りの発話からは解釈され難い、審判者（話し手）の判断に対する従属を要求する、命令的な機能に解釈され得るのだと思われる。

以上で見たように、独立的なガ節は、可能そうな復元によって、かえってニュアンスに変化を生じてしまう。このことから、それらが一つの完全な発話だと考えられる。また、その意味は、逆接の「違和感を表示する機能」と連続的だと言える。そのためガ節も、ド節・ケド節と同じパターンに分類できるだろう。

4. おわりに

本レポートでは、「脱従属化」のうち、「逆接形式からの変化」タイプに注目して、ノニ節・クセニ節・ド節・ケド節・ガ節を取り上げ、それらの類型化を試みた。その結果、「非難的意味の拡張」パターンには、ノニ節・クセニ節が分類され、「違和感を表示する機能の拡張」パターンには、ド節・ケド節・ガ節を分類され得ると考えた。さらに、両パターンとも意味が、元の完全文における意味から連続的に解釈されることを示そうとした。

特に、前者のパターンに属する「のに」と「くせに」とは、形式的にも、体言化を経ている点でも共通部分を持つことが注目される。このことから、ニ節の脱従属化用法も、同様の機能を持つことが類推されるが、今回は十分な用例を発見することができなかった。たとえば、「貴様だってニュータイプだろうに」（「機動戦士ガンダム」四三話）のような、「だろうに」で終止する文は、認められた限り、すべて「言語的、非言語的文脈」からの復元形で、過不足なく翻訳されるように思われる。このことから、これら接続形式は、生産過程による類似を根拠とする類推により、用法が規定されている可能性も考えられるだろう。

参考文献

・久野暉『談話の文法』（大修館書店 一九七八・一二）

・白川博之『「言いきし文」の研究』（くろしお出版 二〇〇九・六）

*掲載した用例のうち、『万葉集』、『蜻蛉日記』、『宇治拾遺物語』、『平家物語』はJapan Knowledge 版『新編日本古典文学全集』（2024年7月26日、最終閲覧）によった。

なお、「機動戦士ガンダム」以外の各作品名には、NDLやJapan Knowledgeへのリンクを挿入しています。